

第1次大戦から100年を迎えて—

百年はめでたしめでたし我にありては生きて汚き百年なりき—これは1890年に生まれたアララギ派の歌人・土屋文明が100歳を迎えて歌った感懐である。土屋がいかなる境涯を「汚き」と慨嘆したのかはわからない。だが、それが日清・日露戦争と二つの大戦、二度の被爆という惨害を体験した日本の100年の歩みと無縁であったはずはない。

そして、2014年、「戦争と革命の世紀」の起点となった第1次世界大戦の開戦から100年を数える。この大戦によって前線と銃後とが一体化し、国力を総動員して戦う総力戦へと戦争形態が一変した。以後、人類は数千万人が戦死する大

戦の脅威の下に置かれることとなった。そのため欧米の人々にとって第1次大戦は、今に至るまで実態解明を要する切実な課題として関心が抱かれ続けている。

他方、日本人にとって第1次大戦は、遠い欧州で起きた戦争として現在では意識されることも少ない。だが、拙著「複合戦争と総力戦の断層」(人文書院)で明らかにしたように、世界大戦という概念は翻訳語としてではなく、開戦から1ヵ月も経ずに日本人が早々と使用し、総力戦や国家総動員という用語も欧米に先んじて頻用していた。

そこではメディアの発達によって戦況が同時性をもって伝えられ、「世界と戦争」のあり方について日本人の認識の大転換が生じていたのである。そして、

山室 信一

やまむろ・しんいち 1951年熊本生まれ。京都大学文学部教授。2013年4月から同所長。専攻は法政思想史。『憲法9条の思想水脈』など著書多数。

アメリカにおける排日運動に対する反発などもあって第1次大戦を第1次日米戦争とみなす議論が現れ、戦後は「次なる戦争」に備えて国家改造を唱える青年将校や新官僚を生み出すこととなった。

むろん、第1次大戦は戦争形態や国家体制を変えただけではない。女性も工場に動員して遂行された大戦は大量生産の生産構造を必要とし、戦後はそれを維持するために大量消費の生活様式が不可避となった。その大

量消費を促す広告宣伝手段であるPRは、大量動員や戦意高揚のためのプロパガンダ手法を転用したものだった。

また、世界的に新女性と呼ばれる世代が登場し、日本でもパーマをかけた洋装の「モガ」の職場進出が始まった。芸術分野でも富裕層に支えられたオ



大正末期から昭和初期ごろにかけ、世間が第1次世界大戦後の好景気に沸く中、欧米先進国の流行や風俗に憧れ、洋装した女性性は「モガ(モダンガールの略)」と呼ばれ注目を浴びた=1931年ごろ(日本電報通信社撮影)

遠い戦争が生んだ現代世界

アジア的視点で意義見直し

そう考えれば、新たな100年を構想していくためには、第1次大戦が生んだ「現代世界」の意義を問い返すことが不可避となる。研究上も近年になって第1次大戦の意義を欧米以外の地域から見直すための交流が進み、アジア的視点の提示が日本人研究者に要請されている。

100年の歩みを経て西欧近代中心主義は相対化される中、現代と世界を認識する、その視座の時空のあり方があらためて問われつつある。

◇(京都大学文学部研究所長)

同研究所主催の国際ワークショップ「第1次世界大戦再考—100年後の日本を考える」が12、13日、京都市左京区の京都大百周年時計台記念館で開催される。独、仏、米国などの研究者計6人が講演する。参加者受け付けは終了。

第1次世界大戦に参戦し、青島を占領した日本兵たち=1914年

